

## 第11章 言語の獲得2：第二言語の獲得 (磯部美和・平川真規子)

### <基本問題>

1. 狭義の第二言語の獲得と外国語の学習を比べて、その違いを整理しなさい。

(解答例) 172 ページに書かれた①～④の項目を基に、狭義の第二言語の獲得と外国語の学習の違いを整理する。

① 対象言語との触れ合いの時間

狭義の第二言語の場合、生活のあらゆる時間に対象言語に触れる。

外国語の場合、教室で学んだり、自分で意識的に学習したりする時間のみである。

② 対象言語との触れ合いの場面の多様性

狭義の第二言語の場合、生活のさまざまな場面で対象言語に触れる。

外国語の場合、教室や教材の場面設定によって限定される。

③ 対象言語を身につけることの必須度

狭義の第二言語の場合、対象言語が使えないと生活が成り立たないので、必須度が高い。

外国語の場合、生活のための言語ではないので必須度は低い。

④ 内的動機づけ

狭義の第二言語の場合、対象言語を話す人々に社会的・文化的に溶け込みたいという気持ち（統合的動機づけ）が強いことが多い。

外国語の場合、いい成績を取りたいとか、留学のための派遣基準をクリアしたいといった具体的な目標に到達したいという気持ち（道具的動機づけ）が強いことが多い。

2. a-f に挙げた英語の自動詞を「非対格動詞」と「非能格動詞」に分類しなさい。

a. sing    b. fall    c. remain    d. play    e. disappear    f. cry

(解答例)

非対格動詞：b. fall, c. remain, e. disappear

非能格動詞：a. sing, d. play, f. cry

178 ページの(6)で検討したように、There 構文に生起できるのは非対格動詞のみである。(Aa), (Ab)に示す通り、fall/remain は There 構文に生起できることから非対格動詞と考えられる。また disappear は(Ac)のように appear が There 構文に出現であることから、appear と同様、非対格動詞と考えられる。一方、sing/play/cry は There 構文に生起できないので、非能格動詞と考えられる。

- (A) a. There *fell* from the sky an angel wrapped in light. (Farrell 2005: 125)  
 b. There *remained* two men in the camp.  
 c. There *appeared* a ship on the horizon.
- (B) \* There *sang/played/cried* a man in the garden.

しかしながら、There 構文に使用できる動詞は存在を表す動詞 (exist, remain など) や出現を表す動詞 (appear, arise など) に限られ、disappear は There 構文に現れることができない。また fall に関しては、(Aa)では“fall from the sky”という点から出現が表されているため文法的であるが、“\*There fell a book.”のように出現が表されていない場合は非文法的となる。詳しくは Levin & Rappaport Hovav (1995)を参照。また、非対格仮説については事例研究 2 も参照のこと。

#### <発展問題>

1. 第 2 章では、日本語の数量詞の遊離規則が構造に依存していることを見た。第 2 章の例文(2), (16), (17)を参考に、どのような文や調査方法を用いれば、日本語を L2 とする学習者の日本語の数量詞の遊離規則が構造に依存しているかどうか調べられるか考えなさい。

**(解答例)** まず第 2 章で取り上げられていた例文(2), (16), (17)をそれぞれ(A), (B), (C)として再掲し、問題文にある「数量詞の『遊離』」について簡単に解説する (数量詞には下線、それによって修飾される名詞に波線が引いてある)。

- (A) a. ライオンがキリンを 3頭追いかけた。  
 b. ライオンがキリンの檻の前で 3頭吠えていた。  
 b'. [TP [ライオンが] [VP キリンの檻の前で [VP [3頭ライオンが] 吠えてい]] た]
- (B) a. 2人の大臣が記者会見に応じた。  
 b. 大臣が 2人記者会見に応じた。
- (C) a. テレビで 2人の大臣の記者会見が放送された。  
 b. \*テレビで 大臣の記者会見が 2人放送された。

(Ba)や(Ca)の文では、数量詞「2人」は、それが修飾する名詞「大臣が／の」の直前に置かれ、「の」によって名詞と結びつけられている。一方(Aa), (Ab), (Bb)では、数量詞はそれが修飾する名詞の後に現れている。(Aa), (Ab), (Bb)の数量詞は遊離数量詞(floated quantifier)と呼ばれ、また、この現象は数量詞遊離(quantifier float)と呼ばれている。第 2 章 (24 ページ)

で見た通り、(Aa), (Bb)における数量詞は文の構造においてそれが修飾する名詞と直接的に結びついているので文法的だが、(Cb)における数量詞が直接結びついているのは「大臣の記者会見が」であり、数量詞が修飾する「大臣」とは直接結びついていないため、非文法的となる。

(Ab)の文では、(Ab')が示すように、「ライオンが」と数量詞「3頭」は、基底構造において直接的に結びついていると考えられる(Miyagawa & Arikawa (2007))。この構造は、第8章で解説された「動詞句内主語仮説」(120ページ)に基づいている(第5章の「発展問題2」の解答例も参照)。外項「3頭ライオンが」はVP内で併合され、その後「ライオンが」だけがTP指定部に移動し、「3頭」はVP内にとどまっていると考えられる(第8章(7b')参照のこと)。

日本語をL2とする学習者の数量詞の遊離規則が構造に依存しているかどうかを調べる方法の1つとして、真偽値判断課題(第10章参照)を用いた実験の実施が挙げられる。たとえば、下の図1のような絵を提示し、(Aa)の文が絵と一致しているかどうかを学習者に判断してもらおう。この時は「一致している」と答えることができ、(Aa)と図2のような絵が与えられた時には「一致していない」と答えることができれば、「3頭」と「キリンを」は直接的に結びついているが、「3頭」と「ライオンが」はそのような関係にないということを学習者は知っていると考えられる。同様に、(Ab)の文は図3の内容を正しく表しているが、図4の内容とは一致しないと学習者が判断できれば、「3頭」と直接的に結びついているのは「キリンの」ではなく「ライオンが」であることを知っていると言える。

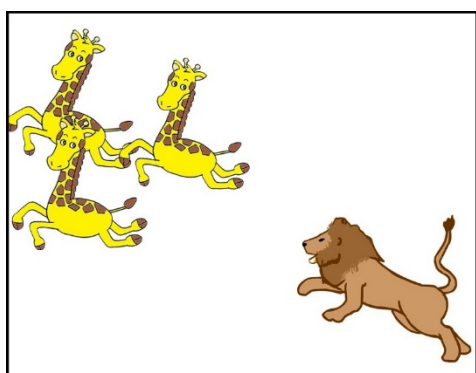


図1

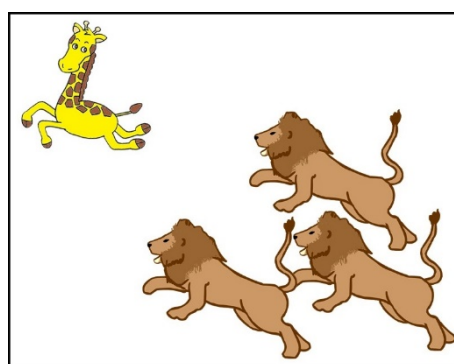


図2

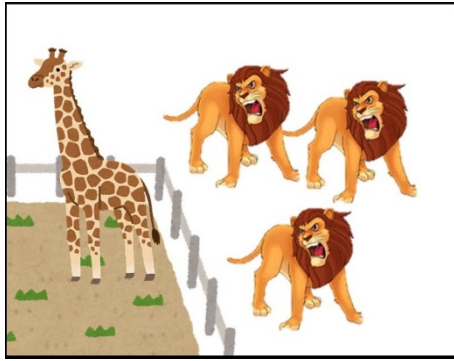


図 3

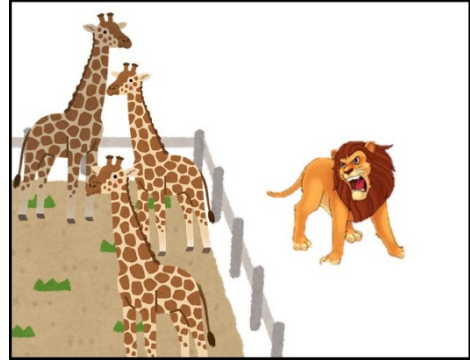


図 4

実験では (Aa), (Ab)だけでなく、(Ba), (Ca)のような、名詞から遊離していない数量詞を正しく解釈できるかどうかを調査し、学習者が基本的な数量詞の使い方を獲得しているかどうかを確認しておくことも重要である。図 1～図 4 に対応する文として (i)のような文が考えられる。

- (i) a. 3頭のライオンがキリンを追いかけた。  
 b. ライオンが3頭のキリンの檻の前で吠えていた。

英語をL1とする日本語学習者の持つ数量詞の遊離規則が構造に依存しているかどうかを調査した研究として Otaki (2008)がある。この研究における実験では、ここで検討した文と類似した文が用いられた。結果は、学習者が、遊離数量詞が修飾しうる名詞を構造に基づいて決定していることを示唆するものであった。

#### <参考文献>

Farrell, P. (2005) *Grammatical Relations*, OUP.

Miyagawa, S. and K. Arikawa (2007) “Locality in Syntax and Floating Numeral Quantifiers,” *Linguistic Inquiry* 38, 645-670.

Otaki, K. (2008) “The Acquisition of Japanese Numeral Quantifiers by Second Language Learners,” *An Enterprise in the Cognitive Science of Language: A Festschrift for Yukio Otsu*, ed. by T. Sano et al., 217-227, Hituzi Syobo.